養生訓巻之第六

慎ム病ヲ

（病ハ生死のかゝる所人身の大事也 聖人の慎ミ給ふ事むべなるかな）

古語に常作病想云意ハ無病の時病ある日のくるしミを常に思ひやりて風寒暑湿の外邪を防ぎ酒食好色の内欲を節にし身體の起臥動静を慎しめバ病なし又古語に曰安閑常思病苦時ヲ云意ハ病なくして安閑なる時ハ初病に苦しめる時を常に思ひ出して忘るべからずと也世人ハ病の時慎ありて恣せざれしバ病生せ[illegible]病おこりて良薬を服し鍼灸をとるゝま

されバ邵康節の詩にも病後能く薬を服せむ
よりハ病前能自防ぐにハしかじといへりこゝろざしとし
病なき時よりそれ慎しめ大病ハ病たゝしつまりて後薬
を服しても病愈て愈る事おそし小慾をつ
しまざれハ大病となる小慾をつゝしむ事ハやすくして大
病となりてハ苦しみ多し病ありて病苦ハゐひやり
後の禍をたつべし

古語に病ハ小愈るに加ると云て病少しよきハ快
きをたのしんでおこたりて慎しまざるより
飲食色慾を恣にすれバ病かへりて重くなる
おいさかる時ハ慎くてつゝしみて
なくなりてうごきされバ病おもく忘て再發ひ
初め時よりつゝしみ慎しまざれバ後悔益あらし
千金方に曰冬温なる事を極めざれ夏涼しき事をき
なかれ凡一時快き事ハ必後の災となる
病生じてハ其のうまじひ身の苦を甚しくまた醫
就まね針薬就の苦を受し針をさし灸をたち
食を忌しなどくに色欲なやまし身をせめて
病就治せんとせんよりハ初に内欲をこらえて外邪を
ふせげハ病おこらざれバ薬就服せず針灸せずして身

うかやミんの若しかハ初めだらしの有ほとしみあるて
ハかのんほうひかれどなの患なすさハえなすらるし
なり後よ薬と汁薬を用ひ酒食をこのむへつし
むハ若き甚しけれど養をとくかし古語よ飲を
慎しむ事ハ始よおもわてせよといへり第の事始よ
よく慎しめハ後よ悔（くひ）なし養生の道ハこうらう
うくの也し

飲食 色慾の内欲を少しもゆるかせにせずしてかたく
慎ミ風寒暑湿の外邪おそれ防がハ病なく
して薬用ひずとも長生まはひかうるべし もし

慾を慎しまずして補ハ [illegible] 脾胃を補
かつ薬酒と食酒とを好まバ必あしかるべし
病ある人ハ養生の道ばかりよく慎しミて病をバ養ひ
苦しむへからず薬ひ苦しめハ気ふさかりて病ぞく
軽病おもくてもよく養ひて久しかれど軽とひよ
重病ハえやもし病をうまいて養かも只慎むよ
養ひかりし必死の病ハ天命の定なれハまよひ
てとも養ふ薬のくるしむれハなかるなり
病なかなく治せんとしていそげバかへりてあやまりて病
をまし保養ハおこたらずつとめていゆる事ハいそか

どゝも自然に任すべし萬の事あやまりなくせん
とこれハ過ぎてあしくなる

居所又寝屋ハつねに風寒暑湿の邪氣を避くべし風寒暑ハ人の身体やぶる事はげしくして早し湿ハ人の身をやぶる事おそくして深し故に風寒暑ハ人おそれやすし湿氣ハ人おそれど人にあたることふかし故に久しくしていえがたし湿ある處をふかく受けざるべし山の崖近き所を避くべし又云わさゝあ近く床ひくくて爰に坐所とすべからず床をたかくして床の下の壁にすかしを開て氣を通はしべし　雨にぬれたる衣にハ速に[illegible]

湿にあたりて病となりていえがたし或疫病流うまれおそるべし文禄の朝鮮軍に戦死の人ハすくなく疫死多かりしハ陣屋ひくくまえるにして士卒寒湿にあたりし故となり居屋を避寝屋をたかくしけ床にし地湿を避くなり一たびハ湿にあたれバいえがたしおそるべし又酒茶湯水を多くのまバ瓜菓冷麪を多く食ハざるハ是皆内湿をうくるなり夏月冷水を多くのミ麪類を多く食すれバ必内湿にやぶらる是

疫癨(くわく)泄痢をうれへしむべし
傷寒と云病ハ諸病の内むねとしわづらふもの也
なる人も傷寒疫癘(れい)をわづらひ死ぬる人多し
おそるべし兼て風寒暑濕をよくふせぐべし動
發のうつる時すくはしむべし

中風ハ外の風にあたりて病といへども内より生ずる
風なりとくに肥白にして氣すくなき人年四
十を過て氣衰ふる時七情のやぶれ飲食のやぶれよ
りて此病生じ兼て酒を多くのみて腸胃をや
ぶり元氣へり内損生ずる故内より風生じて
是なるにハ道加えて外の風にふれて犯し中る事な
らば先皆元氣不足なる故なり故によく氣つよ
き時ハ此病なしわかき人もまれにあるハ必肥(ひ)
衣(え)して氣すくなき人ハ酒多くのみて内うちに熱し
て風生ずるハたとへバ七八月に暑熱甚しくて後久
しくふらざれバ地氣うるほはずして大風ふくがごとし此
病下戸よりハ上戸に多し下戸にあるハ肥(ひ)衣(え)したる人
の盛に氣すくなき人あり是もかへりて不足故
から木の精なきがごとし氣血不足してちからなく
かへりてほろびる也肥白の人酒好む人ハ兼て慎べし

春ハ陽気発生し冬の閉蔵よりひらく人の肌膚和して表気疎く開く故に邪気を稟易しらして風寒に感しやすし甚くしんて風寒にあたるをうらす感冒咳嗽の患あらしむべし草木の発生するも節宣によつてこそやすらかに生ずれ人も節宣をまもるべし時にそゞろに身を運動し陽気を助けめぐらして発生せしむべし

夏ハ発生の気いよゝさかんにて汗もれ人の肌膚大に開く故に移へやとし涼風に久しくむかふべからず沐浴の後風にあたるべからず且夏ハ伏陰とて陰気かくれて腹中にあれハ飲食の消化しかたし多く飲食すべからず温なる物を食ひて脾胃をあたゝむべし冷水を飲べからずすべて生冷の物をいむ冷麺多く食ふべからず老人ハ殊泄瀉のうれひおほし湯あみし度々に浴すべからず暑甚しき時も浴してハ面目斗洗へハ腰を扱き洗ひて手足洗ふべけれど壁中に寐まそくにあふうしむべからず風にあたる所へからず夜外に臥べからず夜外に久しく坐して露気にあてるべからず極暑の時も極て涼しくすべからず日に久しくさらせる熱器の上に坐すべからず

四月ハ純陽の月也尤も炙煿を禁ずべし雉鷄と温熱の物食ふべからず

四時の間夏月尤保嗇すべし霍乱中暑傷食泄瀉瘧痢の病おこりやすし生冷の飲食を禁じて慎んで保嗇すべし夏月此病おこれば元氣へりて大に労す

六七月酷暑の時ハ極寒の時より元氣へりやすしよく保嗇すべし加味生脈散補氣湯醫学六要の新製清暑益氣湯などよし久しく服して元氣の發泄するを收斂すべし一年の内此時分のために薬を服して保嗇すべき時なり東垣が清暑益氣湯ハ湿熱を消散する方也純補の剤にあらざれバ病なくハ服すべからず

夏月古き井深き穴の中に人を入べからず毒氣有古井にハ先鷄の毛を入て毛舞ひめぐらバ毒ありへ入べからず火をもやして入て後入べし又醋を熱くまはして多く井に入て後人入べし○夏至に井をさらへ水を改むべし

秋ハ夏の間肌開け七八月ハ猶暑も猶烈しくして腠理いまだとぢざれバ表氣いまだ堅からざるに秋

風をとしにてかとめまで感してやぶられやとし膚ん
て風寒によふかうらざるべからず病ある人ハ八月節の後
退ごとし按摩して風邪をふせぎ陽を助け
て痃癖乃うれひをまぬかるべし

冬ハ天地乃陽気とぢかくれ人乃血気おさまる時なれバ
気を閉かくして慎つゝしみあつくあたゝめて陽
気を発し泄すべからず汗にて気を泄しむべからずと夜眠
とあつくおほふてよし饑ささいじ夜食多く
冬を○又ハ火気を多く身につけてゆるすべからずハ陰陽
よ滞らもべからず汲ハ労力して汗をおかし陽気を泄と
為うハ

冬至よハ一陽初て生ず陽気の微なるを養ふを
ざし労動をすべからず此日公事にあらずんバ外に出べか
らず冬至の前又ハ後十日房事を忌む又蒙をすべから
ず續漢書に曰冬至ある前を政む冬至よ事を政しるハ
瘟疫と云なり

冬月ハ急病にあらずんバ針灸をすべからず殊に十一月を
忌む又冬月按摩をいむ自身もりふ導引ざる
ハ寒に出しわろくとべからず
除日（古年悪気ノヅリ）よハ父祖乃祠を掃除し家内并よ外室乃

らり給ふらといふ人は惣体ともして内熱はなはだしう家
内虚なるゆへしらに青紫色になりたるは毒ごふかくして爆行
し失ぞたくそて陽気を助くべし家旋しく施ぞうとを
和気津液うしなへとわるともば家人へいろりのる
ゐゆらば毒薬を損ずし家内太小上下抜酒ぞのん
て飲ひ取しみ飲食いねむりして瘡さ早家ぞおそり
新きさ手ぞひみへて給はいてうるきを虫蔵しと云
變發して汗そては風よ當るへからず
凡人の疵うけたるをよりちちあち木石よおされかゝつて撲
傷しうる絶よ気さとうきまかうも少気などとれば家茶
然服してもちうしうかう又発熱よやぶれて血お
わく出たる者は必の人とならくきのえみを防ぐふ為
りく次甚わしく又粥をのきしくば粥ぞのめ
は血すくく出て必死ぬ又さ驚のまう日てもらどんば防
べからば又金瘡并傷口風をうする破傷風ようくうる
ゆく成病すてもわくへからば痙病とかり或破（痙ナリ）
傷風と云
或説に出て遠く由れは酒そのんで色をこそへし
室服して室よ汗するべからば酒はのまざる人は
粥を食へべし　山薑ともく食ふべし　清酒豨の中を

くるべし汝やしき事をなだらして遠くゆくべし酒食を以防ぐべし

雪中に跣にて行て甚寒えたるに熱湯にて足を洗ふべからず火にあたるべからず大寒にあたりて即熱物を食飲すべからず

頓死の症多し卒中風中氣中悪中毒中暑中寒死、湯火傷、食傷、乾霍亂、破傷風、喉痺、癲癇、厥、失血、打撲、小兒の急驚風等の症皆卒死と成又縊して死る類の死あり一には自ら縊る二にはおようする三にはえくに杙竹の巴には殺され厭さるゝ又には溺人

雜症並に暴死もろの病なり當今の時前書を考へ又其治法を良醫にたづね猶てあり置べしかねて見ることくして俄に面對を失ふべからず次に恠奇異なる事なくは因おもひよらざる也必異祟の所為とは云がたし人に病あり眼病あり此病あるときは實に妄なる祈禱によりて而る事多し信してあやまるなかれ

擇醫

醫書の道はことに偏に精しむものなり良醫をえらぶべし天下に人として欠べからざるは父母の教

况てハ庸醫の手にゆだぬるハあやうし醫乃良藥を与へずして父母子孫病る時に庸醫にゆだぬるハ不孝不慈に比すとおやに仕る者も亦醫を知らずんバあるべからずといへる程子乃言むべなり醫術をしらずハわが身醫療に盡せバとても醫術のてだてを知れらバ醫乃好悪を知るだてなき人ハ書畫を能せざる人の筆法をあらそひされバ書畫乃巧拙を知るが如し

醫ハ仁術なり仁愛の心を本として人を救を以て志しとすべしわが身の利養を專に志ざすべからず

天地乃うちにおゐて殊につよき人をもとくひたすけ醫氏の生死をつかさどる術なれバ醫道ハ民乃司命と云こゝをもて大事乃職分なり他術ハつたなしといへども人の生命にハ害なし醫術の良拙ハ人の命乃生死にかゝれり人を助る術も人をそこなふべけれバ学問によく才性ある人を撰んで醫者とすべし醫術学ぶ者もし生れ付鈍にして己を責めんでミづから怠りて早くやめて醫となるべからず不才なれハ醫道に通せずして天乃あたへを損ひ人をそこなふ事つゝしむべし天死おそるべし化

の生業をわすれなく何そ修身のならざることあるべし
されどもつとめ學ばむ醫生ハ其術よりおろそかなれ
ハ天下の病める人をすくふ事もならず又は家名を穢
なく人をやしなはるゝ術もよらずしてあきらかなれ
いのちをまもりうしなふ術をまなび他醫をはじ
めとへのわざをとりて名をあらはすやうにすべし
醫ハ三世をよしとするよし禮記にみえたり醫の
子孫おつてまで其業を生れ付しつゝ世々家業
をつくさむ事よくよく心べし世に在るハ其道を守りて一世と
いふ父祖子孫よりきたれば師承の子弟修へて二世

其業をつぐべし此説をさとしのりてゆかなくハ醫の
みちをしらずハ醫となるべからず他の業を習ハしむべし
しかるに何事かならざらん家業をたもつべし次
凡醫となる者ハ先儒書を見て文義に通ずべし
文義通ぜざれバ醫書を讀むとしもむつかしくして醫学
みがきがたし文理儒の義理に通ぜざれハ醫術を學び
理をしりやすからず故ニ孫思邈曰凡欲爲大醫必須諳
通儒書又曰不知易不可以爲醫此言信之
し諸藝といへどもみな皆文字をしらずしてハ文字
かくれなきわざ熟しても理よくしらく術ひろきし。

ひが事多かれど醫学ありてハ其あやまりを弁ずべし
醫を学ぶにハ先文学を基としてすべし文学の
由ハ醫書をよまんが為にて醫道ハ陰陽五行の理
知る故儒学よりうる易の理をしれバ醫経の道も通じ
しかうなれバ醫書をよむにうつらずして醫
道を志りがたし

文学ありて醫学よろしく醫術も行なハるべく
用ひ多く病にふれて其人数を見れバ是ハ良醫な
醫となりて醫学のことのみにて醫道に志なく
又醫書を多くよみて多くよみても精思の工く
才なくして其理に通ぜざれバ醫書をよんでも舊
説になづみて時の変をしらざるハ拙工也世俗
醫利口にして醫学と療治とハ各別事也と学
問ハ療治に用なしと云てわろく学をそしる人
情にかなひ世事に熟し権貴の家にへつらひ
うつさ高名を得て賞美して世に用ひらるゝ者
多し是を名づけて福醫と云又時醫と云是
醫道にハうとけれど時の幸ありて福徳ある人
故一両人療して偶中すれハ其故に名利を得て
世に用らるゝ事あり才徳なき人の時にあひて富

是よおゐて不同し拾まそ醫乃世よ用らるゝよく用られざるとハ良醫の手よんて定むる所なれバ

あらバ醫道を志さゝる白徒のもの輩、尋ねて事ありて時よあひてなやめるをもてこそ良醫ともとべうらバ其術を信じぐて

古人ハ醫也者ハ意也しといへり意ハ精しきそれハ醫道を志りてよく病を治さと醫書を多くよみても醫術よ志なすくゝ熟くエまなびつゞれて醫術を志らずむぐ病を治さむよ拙きハ醫学せざるよ同じ醫の（議論を醫術の精しくさとしあるを[illegible]り。さ）

まこともの醫書をまなびつくし見ざれバ醫道を知るべしく志ることかたかりし

醫とするハ君子醫とする人し小人醫とするを君子醫ハ人のためよ治人を救ふよ志ある一なる也小人醫ハわがためよ治ニて身の利害乃ミ志し人救ふよ志あらバ醫ハ仁術也人を救ふ君志とゝもべし是人のためよまさる君子醫ハ人を救ふ宜志なくして只身の利害を以志とするハ是わろきなるよよろ小人醫より醫ハ病者を救ハんための術なれバ病家の遠近貧富乃隔なく心を盡して病

を治すべし病家よりまねかば其術をつくしたすくべし

たゞゆくべし遅くとも行べからず人の命は刻々にして不

こゝし病人をまちながら行ざるは是醫といへれど乱

賊分を行ともなる也小人醫は醫術は家ごとにれど殺

身にそこなふをしらずして其術を病家をあなどる

是醫乃本意を失へり

武人乃曰君子醫となりて人を救んが為にこそあるべき

ましく殺すべしとしりて醫となりて仲景東垣などが

如き富貴の人なからは利欲のなきにせざりしを

貧窮のくるしひをみかへられて貪欲はすなわち利欲の

為にせずして良人の病を療す一切の事一切をかへりみず

うきひまなく道でうくべし昔て曰わづらひ利欲の

為に醫となる者なれば是勝なる者なり禄のくずあるも

まつりごとにまかせ利禄の為になすまじと心を

一つにまもりてはわが身をすててひとへに君の

為にまもるべし節義にかゝりては利禄の多少に

よらず一命をもとゞむべし是人の行ふ道なりよ

くまに行るゝば是書よりて禄は求めずとして

己の為に行り一ていは醫となりてひとへに人の病

を治し命を助くるに心有一路ここに事一つに止

すべてわが身然ともすれば専一に忠義をつくしがたく
かるべしわが身の利養をもとむるべからず経書を主とよ
く病家をしへたげて利養を好む事ハ戒め
ずして王国によるべし只専一に醫術をつくして
利養をむさぼらざるべからず

醫となる者家にある時もつ孫に醫書など見へ
理をわきまへ病人を見てハ又その病をしらせる方
書をよんで合せ精（くハ）しく病根見ひて薬方を定む
べし病人をうけて従来の病根見ひとて其ハ
醫書を考へ思ひ患を精しくさとすべし凡醫者ハ醫道
に専一なるべし他の務あるべからず是専一ならざれ
ば業精しからず

醫師にならされども己業をしれども身をやしなひ人ハ
をとふに道ありされども醫藥に妙を好む事を
醫生にあり修まで道に専一ならずして成ごと
しかれば醫業を用ひんより良醫をえらんで
ゆだぬべし醫生にかゝらば術あらくしていたり
にかゝる薬を用ゆべからず其略醫術に通し
て醫の良拙をさとすへき事をうかゞへ藥性を合
相反良毒をしり方書をよんで日用急切の藥を

調和し醫乃いたらさる時ハ病を治し難き
里に扁鵲旅行して小疾を治すとハ所を申し効ハ
人をとらての益而也ハいと彼わる人へもとくてんを聞
ゆべし醫術をまなびてハ醫の良術をもわさ
まへ治世に用ひらくて良工とし用ひられさる
を術工といふ故に醫說に明醫ハ時醫におよばず
といへり醫乃良術をまなびずして庸醫に父母の
命をゆだねこゝろ身体をまかせて醫にあやまられて
死したるためし世に多しおそるべし
士庶人の子弟いとけなき者醫と成べき者ハ
はやく儒書をよみてその力を以醫書に通じ明師
にしたがひ十年の功を用て內經本草以下歷代
の明醫の書をよく学問し醫道に通
し又十年の功を用ひて病者に對して病症を
久しく歷見して習熟し近代の日本中華の
名醫の療術をも考へ病人に久しく馴れて
時変を知り日本の風土にかなひし術を治べく
精しくなり醫学と病功とおほ凡二十年の
久しきを積てハ必良醫となり病を治し名醫と號
ありて人をたすくる事多からん鄕人ハそのつゝ名をし

たとへかりそめにも家大人の指揮あり士庶ハ代数
信をかりくハ禄を得る事なくして一生の受用
ゆるかせなるべし然ども家業よくしれてさとりあれ学功
ぞみづからハ名利を好む事なくハ俯して地に愧るを
しるをひろくふかくたのしみとなりあるべし是士庶の子
弟多く父母なる者の名利を好む奸計なるべし然
ども良工ハ其国の寳なり公侯ハ早くかゝる良
醫を求めて禄を與へ醫としかゝる人より庸醫の
あるさますかひ愚俗の惑を信じ醫学を学ずし
て證脈ハあさらかひ修一の醫書をよまば病源

其脈ハ分ちかたし然ともよく道をしらば醫
術よくしらずして只近世の目なしの醫の作れる字
の醫書或ハ二三巻を考へ薬方功能をかぞへ覚え
よくこゝろえて我か身のたらふるゆへひをさとり辨
説を巧にし人のもとめに切してつくろひ富貴の家よ
ならひといふもしみ時の勢に乗じて誤醫となる
ざるをしやうかゝつて身をたつるまで業醫なるべし
かゝる名醫ハ醫学をしれバかへりて療治に拙しと
云まはりて学問ある醫をそしる醫ぞくなりて
天道のおそれをしらず萬民の毒にて

れなる生命をうけながら世をこえらし病を治せんとして粗忽なる卑怯なる術を行ふもの多くあり近俗醫ハ醫学をもなくして世に近代名醫の絶まるわづかの醫書をよみて薬方を四五十つかひ覚ゆれど醫道ハさらに通じもせず病人に對て醫者の病を治する事醫書をよんで病をよくしれざる者によくされつまたたとへハ經釋の熟したるハ文義の變せざるにまかするがごとしされど醫学なき家醫ハやとへども虛實を數へちらへ實で虛虛のあやまり間ゝ見えてぬすさいひ多し宅まゝ似

たる數ハ症あり變ハ虛に似たる虛症あり虛に似たる實症あり實に似たる虛症あり内傷外感甚だ似たり然れバよく〳〵病多し根ふかく見ん知らずしてつゝしてさ病又つ絲からぜめつらしくてし病何わかりて病ハ治する事ハしさかりなし醫となる人ハまづ志を立てひろく人をすくひ助くるに便りの絲ひ孫らし病人の要務よまらバ治術をさとるべし良醫となる人ハ此業之道明らかに術らハしくわきまへがたきもの也て人をまでてひ世に數あざれどもおのづから人ハようしつゝ用られて

さいはひをうる事はかなはざるべし。只利害
を顧るなかれ。只世人をすくふ志なくハ仁術の理に
そむきて天道神明の冥（みやう）加にはなるべければ
貧民ハ醫者なく藥なく死し愚民ハ庸（よう）醫にあやまらる
ゆゑ死ぬる者多しと古人いへり。おそれつゝしむべし
醫術ハひろく書を考へざれバ事を足らず。精しく理
をさとらざれバ術を用ゆるかたなし。愽（ひろ）く精（くわし）くハ醫学
学ぶの要なり。醫を学ぶ人ハ初より大に志さし
博くして又精しくならふべし。一かたに偏らんハあるべ
からず。次忘　小さくよみわすれくるしからん

日本の醫中華に及ばざるハあらず。学問のつとめ
中華の人に及ばざれバなり。近世ハ和（わ）字（ね）をもて書
書多く世に刊行（かんかう）せり。古学をすゝむる醫書も
かなの書ハむかしよりありしかれども、ひてよすぐれたる学（がく）の
書をよんで醫の道をまなぶ事足（た）れりとおもひ古
の道にすゝまざれバ目なき醫也。醫道にうとくして
て津くみすこし少へだゝりし伊（い）路（ろ）波（は）の文字（もじ）そこ
て世俗をへて文盲（もんまう）にかはるが如し
一　歌をよむにもひろく古書をよんで古学所りそこ古
の下ハいふもさらなり。古学なくして上手ハ見てもまさ

なりとも殺法師といへども醫術を究めく成出し
醫書を多くよんでも達さゝる醫ハありされハ
醫道によく紙習ひしてならずなどが醫云
説よまずして上手ハあるまじきにやまし惜学者
識（りき）あつて道を知らぬ儒士ハ多し然れども学者にても道
を志る人ハまれなるがごとし

醫ハ仁術なれバ名利を求むべからず病者あれバ
しそ薬をもて救（き）ひたすくべしされども病家より薬代
求むる事切（ち）なれバ多く薬代あつめんと欲して
ともしがたしわかちて病を見付て生死を知る名を経
ゆへ病人ハよく薬代あつむべしといへども病ハ悔
如し醫の薬代わるくされバ病人ハよくちら
らぞおもし理ありてこれをしべし

醫ハ学ぶにはよみなるべき法をたゞ徐ゝひろく学び
古方をよく考ふべし又今世の時運を考へ人の
強弱をえらび国ゝの宜しく民俗の風氣を知り
又古より出し名醫の治せし跡をよく考へ
て治療を術ふべしいかしへよきつゝ今よ宜
しくハあやまりも多くなるべし古法をもとにして
今の宜に合せんとするを變（うら）と云古法によくかなふ

今の世に合ざるを泥と云ものなり因て古に
くらく今に通ぜずしては醫道行るべからず然ば
人も過不及を知新して師とすべし世の下手醫
師も亦かくの如くなるべし

業の病に應ずるに適中あり偶中あり適中は良
醫の業必應ずる也偶中は庸醫の業不意にも
應ずる也是ハ人に幸ある故に術はつたなけれど
も幸ありて病に應じたる也されど庸醫
なれば應せざる事多し良醫の適中の業
採用べし庸醫はよのりけがし偶中の業は
あやふし適中は狙射る者の的にあたるがごとし偶
中は拙き者の不意に的に射あつるがごとし

醫となる者は附の書を能讀て扁鵲の家に用らるを諸醫
とならしめて醫學をつとめ只精門に從ひに出入
し從ふし數あめて名利を好る者多し醫術のすゝ
みて拙く守り庸醫の多くなるは此故なり

諸藝には日用のためにも無益なる事多し其ハ醫術へ
是用の事は醫學にあらずとも學ぶべし凡
儒者は天下の事皆知るべし故に古人醫は儒者
の一事といへりこれ醫術はわが家へもあひ

父母よ仕へ人を救ふよ益ある道ハ色々の雑藝よ
こえて最善なりとするらんハあるべからずとも醫
生ハ然ども藥術よ習熟して家よ業ハ因習を
かゝず

醫書ハ内經本草を本とし内經を考へざれハ醫術
の理病の本源を志りがたし本草を志らざれバ
藥性ハ志らずして方を立る事なし且食性を志らず
して宜禁を定めがたく又食治の法ハ志らざれバ二
書を醫學の基とし此二書の外秦越人の難
經張仲景の金匱要略皇甫謐の甲乙經巣
元方の病源候論孫思邈の千金方王燾の外
臺秘要羅謙甫の衛生寶鑑陳無擇の三因方
宋惠民局の和劑局方證類本草序例錢仲
陽の書劉河間の書朱丹溪の書李東垣の
書楊珣の丹溪心法劉宗厚の醫經小學玉
機微義熊宗立の醫書大全周憲王の袖珍
方周文采の醫方選要薛立斎の醫案王
金の醫林集要樓英の醫學綱目虞天民の
醫學正傳李梴の醫學入門江篁南の名醫
類案呉崑の名醫方考龔廷賢の書數種

汪石山の醫学原理 高武の鍼灸聚英 李中
梓の醫宗必讀 頤生微論 藥性解 内經知要
あり又薛立斎の十六種あり醫統正脉ハ四十二種
あり歴代名醫の書をあつめて一部とせ皆
醫生のよむべき書也 年よりさき時代儒書をも
記誦し其力を右の醫書をよんで能記すべし
張仲景ハ百世の醫祖之其後歴代の名醫とも皆
ろ彼が範内よりて出又多しといへども各書を統に編
輯の失あり取捨すべし 孫思邈ハ又養生の祖
なり千金方にあらはす養生の術も醫方も善
宗とすべし 老荘氏好んで異術の人なり
ども又吟味し醫生よくせば儒書に通し
易をも知るべしと盧照鄰に答へし數術諸
理あり此人後世に益あり醫術に功ある皇
甫謐葛洪陶弘景等の諸子に越へたる壽百
餘歳なりしハよく保養の術に長せし事なら
びなし日本に方書の来りし初ハ千金方なり近世
醫書板行せし初ハ醫書大全なり此書ハ
明の正統十一年に熊宗立編じ日本にて大永
の頃にて同八年和泉堺の醫阿佐井野宗瑞

判行之と活板正徳元年まで百八十四年之を後
活字の醫書やゝ絶く板行も寛永六年己巳
扁板鏤刻の醫書繁多し
凡諸醫の方書編次ありといへども一人ハ所宗として一書
を用ひてハ治をなしがたし学者多く方書にわ
づらひ繁く異同を考ふるハ盡ざるところにて甚難かる
ざれども醫療をなすべし此後有識ある人ハ世を助け
救ふ志あらバ廣く方書をあつめて重複をはぶき
まゝ繁雑なるを除き又粹（すい）美（び）なるをあつめ
て一書となさバ純正なる全書となりて大なる
世寶なるべし此事ハまた人を待て行るべし凡
近代の方書醫論脉法業方同じき事甚多
し譬ば醫廷賢の方書數部同じ事多くして
重出甚しく形ハし無用の雜說多し凡病よ
のぞんでハ數多く方書を撿もとむる事煩勞なり急病
よ對しふえらに廣く考へてまたね惑せる良方
を求めがたし同事多くね似たる方を多くあつ
め考るをいふなり才学ある人ハ無益の方をなし
て勝（まゝ）てつひやさんよりかゝる無益の事をなして世を
助け後へ人へし世にまれなる人へ豊なるへまや

局方發揮出て局方をそしる局方に古方多し古哉考ふるに用べし廣いべけれバ然れども烏頭附子等の燥剤を多くのせたるハ用ゆべからず近頃用ひに醫書大全を用ひ龔廷賢の方書流布して東垣の書及醫書大全其外の俗方を流醫用ひして醫術せらるくわくとみる三因方袖珍方。醫書大全。醫方選要。醫林集要。醫學正傳。醫學綱目。入門。方考。原病式。壽世保元。證治準繩等も其外方書を多く考へ用ゆべし入門ハ醫術の大略備れる好書也龔廷賢の書のみ偏に用ゆべからず龔氏の醫療ハ時學の便を爲衰弱の時宜に合ひて其術世に行れし也用ひやすきを亦古方を志る人ハ嫌ふ事多けれど要に用ゆべし悉くハ信ずべからず是を放かんとせバ雲林が醫術ハ見識ひくゝして他人の作れる書をうつして己が作とし他醫の治せし療功を奪て己が功とし不經の書を作りて人に誇をなし又紅鉛などと云穢惡の物を以て製する事を人にすゝめて良藥とせり醫術をもて衒ひ自助とせし惡人の操行なり恥しむべし

我よりもまへに其病人に薬を与へし醫の治法をとひあやまりとなし前醫をそしるべからず他醫をそしりてわが術をかざるハ小人の心なり醫の甚忌あらバ是を包ミかくし人にさへ不云しても為治すべし

此業の内古人の説まちまちにして一やうならねバ異同あらバ之を内思して考へ食せ擇び用ゆべし又薬物も食物も人の性によりて病症によりて宜不宜あり

一際にハ姙否を定むべし

醫術も亦其道多端なりといへども其要二あり一にハ病論二にハ脉法三にハ薬方なり三乃事をよく知べし運氣經絡の事をもあらましるべし又とも二要乃次之病論ハ内經をはじめとし諸名醫の説どもを考みるべし脉法ハ脉書數家を考ふべし薬方ハ本草をなずらひてひろく諸方書を見るべし薬性よくしりたらんハ薬方を定るべくして病に適ふべしさて又食物の宜否をしらずんハ無病も病者に保養にあやまりあるべし薬性食性ともに草木に糺どんへ知べし

或曰病ありて治せバ其上中醫を招かといふ道理

猶よ志かるべし然らハ病あらハ只上醫乃薬を服す
べし中下の醫乃薬ハ服すべからず今時上醫ハ
まれなり多くハ中下醫なるべし薬ハのまぬぞ
醫ハ無用乃拙なるべしと云書曰あらバ病あれ
こらへて治せざれバ薬をのむべからずと云ハ實を熟慮
實なし凡病の相似てまぎらハしくうたがハ
しきむつかしき病紙以り淺落なる治しやすき
症ハ下醫といへどもよく治して感冒咳嗽ニハ參
蘇飲風邪發散なるに香蘇散敗毒散藿
香正氣散食滯よ平胃散香砂平胃散なり
乃類ハまた近かくてべしうちハ病の道ハ下
醫も治しやすく薬を服して害なかるべした
乃病ハ薬なかるしなるむつかしき病ならハ薬を閣
きして可也

養生訓巻第六　終